

キリストを着る

— 普段着のようにして —

【聖書箇所】 13 章 8～14 節

はじめに

●今回は、14 節の「主イエス・キリストを着なさい」というみことばを中心にして、私たちキリスト者が対社会生活におけるあり方について考えていきたいと思います。「主イエス・キリストを着なさい」という表現は比喻です。人は身なりによって、その人がどういう人かを判断します。普段着であろうと、特別な服であろうと、人が何かを着たなら、まわりの人々はその着ている服によって判断します。例えば、制服を着ているなら、その制服からその人の職種や立場が分かります。あるいは、どこの学校の学生なのか、どこの店の店員かが分かります。「着ている服」によって、自分がどのようなものであるかを示されるといふことです。

●ところで、キリスト者はどうでしょうか。どんな服を着ることによってキリスト者として知られるでしょうか。長い間付き合ってきたけれど、「あなたがキリスト者であるとは少しも気づかなかった。」と言われたとしたら、いったいどんな服を着ていたのでしょうか。

●聖書は、「主イエス・キリストの服を着なさい。」と勧めています。これはあなたが心を改めて、そうしなさいと勧めているではありません。すでにキリストのものがあるならば、すでにあなたは主イエス・キリストの服を着ているからです。「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたは、みなキリストをその身に着たのです」(ガラテヤ 3:27)とあります。すでにキリストを身に着ているのです。そのことの自覚をもって生きることが求められているのです。ですから、「主イエス・キリストを着る」とは、私自身が隠されて、主が外に現われてくださるという生き方を意味します。

●イエシュアが人々に見られ、イエシュアが私たちのことばを通して、また行いや生活態度を通して、イエシュアが現わされるようになるということです。キリストに似る者となることです。これが本当の証しです。この証しは私たちの力や頑張り、努力では決してできません。これは私たちの内におられる御霊の働きによるものです。ですから、使徒パウロはこう言っています。

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント書 3 章 18 節

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

●そもそも聖書の中で最初に「クリスチャン」ということばが登場するのは、使徒の働き 11 章、つまり世界宣教の基地となったアンテオケにおいてでした。この「クリスチャン(キリスト者)」ということばは、当初、軽蔑的なことばとして呼ばれたあだ名でした。その意味するところは、「口を開けば、彼らはいつも

キリスト、キリスト、まるであいつらはキリストの奴隷だ」というものです。このことから、アンテオケのクリスチャンは、イエシュアを普段着のようにして着ていたことが分かります。ところで、人々はキリスト者のどのような態度にキリストの似姿を見ていたのでしょうか。

1. 人を愛することにおいて

●8節に「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。」とパウロは記しています。借りをつくるなということです。八尾福音教会の週報(1994.11.27)を藤井一郎兄からいただきました。その週報には、その教会の会議の報告が載っていました。その中に「教会員として次のことを申し合わせとする」という一文が記載されていました。「教会員間の金銭の貸借、物品の売買、金銭の保証人となること等は、お互いの心の負担となり、教会本来のあり方を損なう場合がありますから、原則としてしないことにしましょう。」

●事実、このような問題が教会の中に起こっていたと思われます。私たちは、キリスト教は愛の宗教だからという理由で、お互いに気安くお金を貸したり、借りたりしてはいけないということです。どんなに親しい仲でも、金銭のけじめができない場合、必ず、サタンの罠にかかるからです。人から借金しないように、正しく金銭を管理し、また働かなければなりません。

●とはいえ、借金厳禁ということではありません。あるクリスチャンは一切の借金をすることは罪だと考えています。「何の借りもあってはならない」のですから、物を買うにしても、必ず、現金買いという人がいますが、そういうことをここで教えているとは思いません。特に、金銭的けじめがないことは、対社会的においても、また教会間の中でも、大きなつまづきを与えることになるということを教えているのです。金銭的な面でルーズな人は、他の事で立派なことをしていたとしても、社会的な信用を得ることは決してできません。

●「何の借りもあってはならない」ということは、一切借りることをしてはならないということではなく、借りたものをそのまま放置しない、借りっぱなしにしてはならない、借りたものは必ず返すという意味です。このことによって、他の人との信用を保ち、また信用をつくっていくためにとても重要な条件です。この点においてそれぞれ心のチェックをしましょう。イエシュアを着るということは、小さなことにおいても敏感になるということです。

●しかし私たちがどんなに借りをつくるのを避けようとしても、避けられない借りがあります。それは金銭的なものとは異なる、愛の負債です。私自身、今まで家族や教会の人やいろいろな人の計り知れないほどの愛に接して来ました。この愛の負債は年ごとに増すばかりで、その利子だけでも返すとなると大変なほどです。ですから、キリストの愛によって賜わる愛の負債は、完全に返済することは不可能です。

●愛については、これだけ返せば良いというものではありません。たとえば、私たちは神の愛をイエシュ

アの十字架の贖いを通して知らされた者ですが、その愛をこれだけやれば返せるということはないのです。金銭的、物質的なものであるならば、借りたものを返してしまえばそれまでのことですが、愛に関して言えば、いつまでも負債として考えるべきであるというのが、聖書の言うところです。

●使徒パウロは、「私は・・・返さなければならない負債を負っています。ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。」(ローマ 1:14~15)と述べていますが、パウロがあれだけ一所懸命に宣教したのは、負債の返済だと言っているのです。すべてのキリスト者は本来、払い切ることのできない愛の負債を主に対して負っている者なのです。人を愛すること、自分のことのために生きるのではなく、主のために、それは同時に人のために生きること、あの「よいサマリヤ人」のように、これがキリストを着るといふことなのではないでしょうか。

●ピレモンへの手紙に見られる愛の交わり、愛の実践、これは当時としては画期的なことでした。少し、この手紙の背景をお話しましょう。

ピレモンというキリスト者がいました。彼は自分の家を解放し、「家の教会」としてパウロと同じ同労者と呼ばれるような立場にいました。彼はまたローマ社会の制度における奴隷を持つ身分であったようです。ところが、その奴隷の中の一人が盗みを働き、その主人であるピレモンの家から脱走し、はるばるローマまで逃げ延び、その後、牢獄に入れられ、そこでパウロと出会ったのです。この奴隷の名前は「オネシモ」です。パウロはこのオネシモのことを「**獄中で生んだわが子オネシモ**」と呼んでいます。パウロはこのオネシモを自分のところに置いておきたかったようです。ところがこのオネシモの所有者はピレモンでした。

●当時、奴隷は家畜と同じ立場で、人権は認められていませんでした。もし奴隷が主人に立てつくなら、主人が奴隷を殺しても罪に問われることがなかった時代です。この時代に、イエシュアをキリストと信じる人々は、どんな人間も神によって造られ、愛されている存在であることを伝えました。この教えは、奴隷社会であったローマ帝国を根底から揺るがしかねない危険な教えであったのです。

●パウロはピレモンに宛てて書いた書簡の中で、以下のような驚くべきことを書いています。

【新改訳改訂第3版】ピレモンへの手紙 10~18節

10 獄中で生んだわが子オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。

11 彼は、前にはあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとっても私にとっても、役に立つ者となっています。

12 そのオネシモを、あなたのもとに送り返します。彼は私の心そのものです。

13 私は、彼を私のところにとどめておき、福音のために獄中にある間、あなたに代わって私のために仕えてもらいたいとも考えましたが、

14 あなたの同意なしには何一つすまいと思いました。それは、あなたがしてくれる親切は強制されてではなく、自発的でなければいけないからです。

15 彼がしばらくの間あなたから離されたのは、たぶん、あなたが彼を永久に取り戻すためであったのでしょうか。

- 16 もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟としてです。特に私にとってそうですが、あなたにとってはなおさらのこと、肉においても主にあって、そうではありませんか。
- 17 ですから、もしあなたが私を親しい友と思うなら、私を迎えるように彼を迎えてやってください。
- 18 もし彼があなたに対して損害をかけたか、負債を負っているのであれば、その請求は私にしてください。

●ある伝承によれば、オネシモは教会の指導者となったことが言われています。パウロはここで奴隷制度を力によって変革することを言っているではありません。力ではなく、愛によって、つまりオネシモを愛する兄弟として受け入れることによって求めているのです。この世は、力によって人を阻害しようとする弱肉強食の世界です。しかし教会はそうであってはなりません。キリストの愛が満ち溢れた神の宮でなければなりません。教会がどんなに数的に成長したとしても、そこに愛がないなら、空しい存在です。もしどんなにお金があったとしても、その家庭に愛がなく、争いと憎しみが満ちているなら、空しい限りです。聖書は箴言 17 章で、「一切れのかわいたパンがあって、平和であるのは、ごちそうと争いに満ちた家に勝る」と述べています。また、「知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。」(I コリント 8:1)とも。

●教会において、愛の交わりを作っていくためには、みことばの原則に従わなければなりません。牧師と信徒だけの関係ではなく、信徒相互の教会が必要です。「互いに真実を語りなさい。なぜなら、私たちはからだの一部として互いにそれぞれのものだからです。」とあります。良い所ばかり見せるのではなく、自分の弱さも、醜さも、愚かさもさらけ出す勇気が必要です。「互いに真実を語る」ことによって、はじめて真実のきずなが生まれるのです。私たちはみな罪人であり、神の前に赦された存在です。だれかが立派だということはありません。「だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。」(ガラテヤ 6:3)。弱さの中に働く絆の強さを求めていかなくはなりません。互いに自分のことだけでなく、他のキリスト者に対しても関心を持つべきです。同じ主にある兄弟姉妹を愛せない者が、この世の人を愛していくことはできないからです。もし、キリスト教会において、兄弟愛が見られないならば、その教会の建設は失敗です。キリスト教は単なる教えでなく、愛そのものです。「主イエス・キリストを着なさい。」つまり、キリストの愛に生きることを通して、この世にキリストが生きておられることを証ししていく教会となるように、主に祈ろうではありませんか。

2. 時を知る者として

●11 節以降に関して、ここでは「あなたがたは時を知っている」者として、今の時をふさわしく生きべきことを教えています。ここで言う「時」とは「キリストの再臨の時」です。やがて歴史は、白黒がはっきりとつく日を迎えます。来ます。すでに約束されたメシアなるイエシュアがこの世に来られたように、再び、この世に再臨されます。主の再臨を遅らせているただひとつの理由は、神の愛によって、「ひとりも滅びることなく、すべての者が悔い改めに至ることを望み、忍耐しておられる」からです。

【新改訳改訂第3版】ローマ書 13 章 11~14 節

11 あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行いなさい。あなたがたが眠りから

さめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。

12 夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。

13 遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。

14 主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。

●11～14節のみことばによって悔い改めた一人の人がいます。その人の名は、後の偉大なキリスト教の神学者となったアウグスチヌスです。彼はその優秀な頭脳を持ちながら、青年期は放蕩三昧の生活をしていました。しかし彼の母の涙の祈りによって、ついに彼の生涯に悔い改めが起こったのです。彼はその残る生涯を神の徹底的な恵みに立つキリスト教の神学を打ち建て、後のマルチン・ルターやジョン・ウェスレーに多大な影響を与える人となりました。その彼が疲れ果てたある時、子どもが遊びながら歌っている歌を聞きました。その歌は、ローマ書 13 章 11～14 節に基づく讃美歌だったのです。彼はこのみことばによって、文字通り、「やみのわざ」を捨てて、イエシュアのもとに来たのでした。そして、それからの彼は、キリストのために、キリストの愛の負債を返すべく、神から与えられたすべての賜物を主にささげて、残された生涯を、おもに哲学や神学の面でキリスト信仰を弁護すべく、歴史に残る大きな働きをしたのです。その影に母モニカの涙の祈りがあったことは言うまでもありません。愛は時間がかかるかも知れませんが、必ず、勝利を得るのです。そのことを信じながら、愛という普段着を着ながら、歩んで行きたいと願われます。

1995.6.18